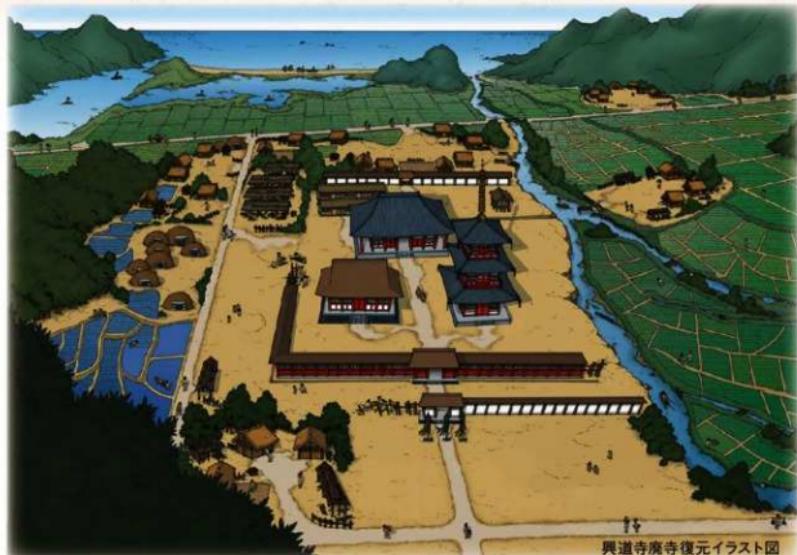


興道寺廃寺



興道寺廃寺復元イラスト図



興道寺廃寺出土軒丸瓦

興道寺廃寺は、福井県三方郡美浜町に所在する古代の仏教寺院の遺跡です。7世紀後半になると、国の仏教政策によって日本列島の各地に多くの古代寺院が建立されました。興道寺廃寺は耳川流域を拠点とした豪族がその頃に建立した寺院です。

平成14(2002)年から13年に及ぶ発掘調査によって伽藍建物の跡や多くの遺物が発見され、8世紀後半の大規模な再建を経て、約300年に渡って法燈を守った寺院であったことがわかりました。

興道寺廃寺の立地と周辺の環境

興道寺廃寺は耳川下流域の左岸に広がる河岸段丘に立地します。遺跡の現況は、周囲を水田に囲まれ、寺院跡は畠地となっています。

興道寺廃寺は、北に古代北陸道と若狭湾を、東に耳川の流れを望むなど、水陸交通の要衝の地に、また越前国と接する若狭東縫の要地に建立されました。

興道寺廃寺の時代から少し遅り、寺院が建立される直前の古墳時代後期（6～7世紀）の耳川流域の動向を確認すると、集落遺跡や墳墓、生産や祭祀にともなう遺跡があり、流域を治めた豪族が存在したことがうかがえます。

興道寺遺跡、藤ノ木遺跡は興道寺廃寺が立地する耳川下流域の左岸河岸段丘に大きく展開する集落遺跡です。特に興道寺遺跡では、6世紀前半の大型掘立柱建物跡1棟と6世紀後半から7世紀前半にかけての堅穴建物跡3棟、掘立柱建物跡1棟、柱穴列10基が発見されています。興道寺遺跡の北方に位置する藤ノ木遺跡では6世紀初め頃の堅穴建物跡1棟が確認されています。興道寺遺跡、藤ノ木遺跡の堅穴建物跡からは製塙土盤が出土するなど、集落居住者たちの土器製塙（土器を用いた塙作り）への関与が考えられます。

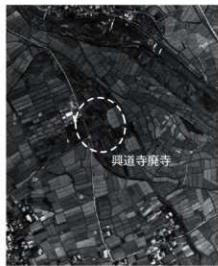


写真1 興道寺廃寺周辺の空中写真
(米軍撮影の空中写真を複製承認番号 平28情復第1062号)



写真2 興道寺遺跡掘立柱建物跡



写真3 興道寺遺跡堅穴建物跡



写真4 藤ノ木遺跡堅穴建物跡



図1 興道寺廃寺位置図(縮尺1/25,000)
「この地図は、国土地理院の承認を得て、数値地図25000(地図画像)を複製したものである。(承認番号 平28情復第1062号)」

松原遺跡、早瀬遺跡、興道寺廃寺は耳川流域でも代表的な6、7世紀の生産に関する遺跡です。

松原遺跡は耳川河口部の河岸段丘に所在し、5世紀後半から6世紀にかけての土器模造品が出土し、また7世紀中頃の石敷きの製塙炉3基や多くの製塙土盤が発見されています。早瀬遺跡は若狭湾を望む海岸段丘に所在し、6世紀代の石敷製塙炉3基が確認されました。

興道寺廃寺は雲谷山から派生する尾根の西斜面に所在し、灰原から6世紀初め頃の須恵器、円筒埴輪などが、窯床面からは7世紀初め頃の須恵器が出土しています。

古墳(群)には獅子塚古墳、興道寺古墳群などがあります。獅子塚古墳は藤ノ木遺跡の近くに所在する全長32.5mの前方後円墳で、墳丘には円筒埴輪を配し、墳丘の周囲には周溝をめぐらせ、埋葬施設に北部九州系の横穴式石室を備えています。6世紀初め頃の須恵器、鍛冶関連遺物、玉類、鉄製武具、鉄製工具など豊富な副葬品が発見されています。耳川流域を治めた地域豪族の墳墓と考えられます。興道寺古墳群は獅子塚古墳の南方、興道寺遺跡の西方に分布する10数基からなる古墳群です。獅子塚古墳とともに一古墳群を形成し、6世紀代の流域の地域豪族の系譜にある古墳群です。

興道寺廃寺の創建を遡ること約200年前、すでに6世紀の段階には耳川流域に有力な地域豪族が現れ、寺院建立まで勢力を誇るなど、寺院建立の素地が養われていたと考えられます。



写真6 松原遺跡土器模造品



写真5 耳川下流域空中写真(福井県教育厅埋蔵文化財調査センター提供)



図2 耳川下流域における遺跡分布模式図

これまでの発掘調査

興道寺廃寺は、大正時代、県農事試験場（県園芸試験場）建設の際に布目瓦が残る多量の瓦片が出土したことでの所在があきらかとなりました。

興道寺廃寺に関する調査研究の初見は、昭和8（1933）年、上田三平氏が「越前及若狭地方の史蹟」後編、「三・廃寺跡 若狭地方の古瓦及礎石」の項で「三方郡耳川沿岸の興道寺地籍の觀音壇と稱する地域には多數の古瓦を出土し、並車紋のものも發見されて居る。（中略）紋様は鈍重、著しく地方色を帶びたものである。」と出土瓦を紹介し、簡単な資料報告をおこなっています。これより古い記録として、「耳村誌（稿）」「第三章 大字誌」、興道寺の項に「（前略）。名称の興道寺の事今は全く微すべきものなし。口碑に云、往古小字觀音の地に廣堂觀音堂あり、靈験殊に著しくして衆庶の信仰厚く、門前自ら市を作したりしが、平安朝の頃、朝廷の廟依に由りて京都に移せられたり。（中略）此地に私利の存したるは事実なるべし。今尚同小字附近の土中に瓦の破片、大なる礎石等を發見する事あり。（後略）」とあります。

1958（昭和33）年に興道寺小字中ノ丁から軒丸瓦がほぼ完形で出土するなど、継続的な古瓦の出土採集があったよう、昭和39（1964）年4月発行の『美浜町文化財調査台帳』には、「觀音堂址（布目瓦出土地）」の所在地がメモ書きされています。付近の觀音という小字名をもとに「觀音廻廃寺」と呼ばれ、地元の愛好家、郷土史家の間では早くから古代寺院の存在が知られていました。

1977（昭和52）年、興道寺小字中ノ丁付近において周辺の土地改良事業に伴う福井県教育委員会の試掘調査がおこなわれました。この時、軒瓦を含む多量の瓦片が出土し、基壇の一部と思われる地面の高まりが確認されたことで寺院の構造が残存する可能性が指摘されました。

1997（平成9）年以後、興道寺廃寺の北～西方、興道寺遺跡の北縁部で美浜町教育委員会などによる発掘調査が進められ、これらの開発事業が興道寺廃寺まで及ぶ可能性が危惧されたため、2002（平成14）年度から2015（平成27）年度までの13年間、16次に及ぶ美浜町教育委員会による内容確認調査が継続的に進められてきました。



写真10 興道寺廃寺空中写真(西から撮影)



図3 昭和39年(1964)4月発行
『美浜町文化財調査台帳』

興道寺廃寺の伽藍と寺域

長い発掘調査によって、伽藍や寺院に関する遺構が次々と発見されました。

興道寺廃寺の寺域は、南北112～118m、東西80mほどの規模であったものと考えられます。

南側で南門基壇が見つかり、寺院の正面には門と築地塀が東西に延び、寺域の北側と西側で見つかった溝の存在から寺域の周囲は築地塀、溝などで区画されていた可能性が高まっています。

寺院中央部の伽藍域では、金堂、塔、中門、講堂の基壇（土壤状の建物基礎）が発見され、その位置から中門の北側に塔と金堂が東西に並び建ち、さらに北側には講堂が所在し、寺院の宗教空間を作り出していたものと考えられます。法起寺式伽藍配置と言われる伽藍をとり、伽藍には創建期と再建期とも言うべき2時期があったことが発掘調査であきらかとなっています。

伽藍の北側には、掘立柱建物跡などの建物群が展開しています。僧房、雜谷などの建物施設が存在したものと考えられます。

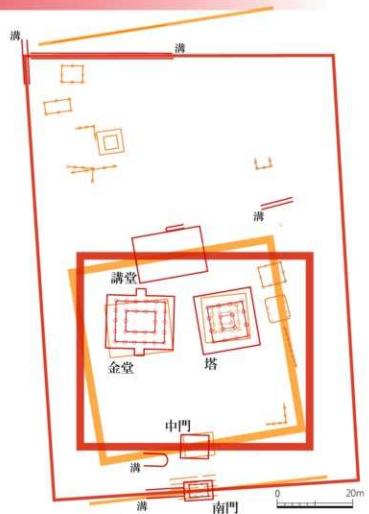


図4 興道寺廃寺伽藍復元模式図(縮尺1/1,000)



写真11 興道寺廃寺空中写真(南から撮影)

伽藍城に所在する金堂、塔、中門、講堂などの寺院建物の遺構について、発掘調査で得られた成果をもとに7世紀終わり頃から8世紀前半の創建期、8世紀後半以後の再建期に分けてご紹介します。

金堂は本尊仏を安置した寺院の中心をなす建物です。創建期と再建期の金堂の基壇が見つかっています。

創建期の金堂基壇は、地山層（もともとの河岸段丘の表層を構成する地層）の削り出しによって造られました。基壇の周囲にも掘込地業（地盤の強化作業）をおこなっています。基壇積み土（基壇として積んだ土）はかなり精緻で堅固な版築（土砂をつき固めること）を施しています。基壇の南北軸の方位は座標北から6度西偏し、基壇の規模は東西約16.8m、南北約13.8mに復元できます。基壇周縁に分布する瓦溜まりは再建期の整地土に埋められ、大ぶりで遺存状況のよい瓦群が多く分布しています。

再建期の金堂基壇は創建期の基壇をそのまま利用しながら北側と東側を若干拡張し、南側と西側を削平して造っています。金堂基壇の南北軸の方位は座標北から2度東偏し、創建期の段階から大きく東に振られています。基壇の規模は東西約18.0m、南北約14.1mで、外装（基壇周縁）に石積みを伴っています。南北中央に柱間1間分の幅の階段が付設されていたようで、北面階段の幅24m、階段の出1.6m前後に復元されます。基壇の高さは1m弱（現存高は約0.2～0.3m）、金堂の建物の柱間は2.4mとして、東西5間、南北4間、つまり東西12.0m、南北9.6mの平面規模に復元されます。

再建期の金堂基壇の周縁からは、多くの瓦片とともに、鉄釘、塑像塊が出土しています。



写真14 創建期金堂基壇の版築状況



写真12 創建期・再建期金堂基壇北辺・西辺



写真13 再建期金堂基壇北辺の瓦溜まり



写真15 再建期金堂基壇の北面階段

塔は元来、基礎に仏舎利を納めた高層建物で、三重塔、五重塔など寺院のモニュメントとしての役割を果たしました。創建期と再建期の塔の基壇が見つかっています。

創建期の塔基壇は、西側では地山層を削り出して基壇縁邊を造り、東側では溝を掘削し、基壇の内外を区画したようです。南北軸の方位は座標北から6度西偏し、基壇の規模は一辺12.0mです。基壇周縁の再建期の整地層に大ぶりの瓦片が埋められています。

再建期の塔基壇は、創建期の基壇の下部を埋め、全体的に拡張して造っています。創建期の塔基壇の下部をそのまま残して、上にかさ上げするように基壇を造っています。基壇の南北軸の方位は座標北から10度西偏し、基壇の規模は一辺約15.3mに復元されます。

基壇の検出面から基礎抜き取り坑、四天柱の礎石据え付け掘り方3基、側柱の礎石据え付け掘り方4基を確認し、柱間の長さは中央間3.3m、脇間3.0mに復元されます。基壇の周囲からの瓦などの出土は多くありません。

中門は、伽藍城に入るための正面の門です。再建期の中門基壇が見つかっています。

再建期の中門基壇は、盛土で造り、外装に石積みを伴います。南北軸の方位は座標北から2度東偏し、基壇の規模は東西約7.4m、南北約6.2mです。再建期の基壇積み土または再建期の整地層にあたる部分から銅製錢貨が出土しました。基壇の南西側に回廊（廊下状の施設）に伴うと考えられる溝が見つかっています。

講堂は、僧尼が修行、学問などをを行うための建物です。創建期と再建期の講堂基壇が見つかっています。

創建期の講堂基壇は北側と東側に掘込地業を施した後に基壇積み土を盛土します。基壇の南側では良質な粘土質土を用いて整地し、その上に基壇の積み土を盛土します。南北軸の方位は座標北から10度西偏し、講堂基壇は東西約18.0m、南北約12.0mに復元できます。

再建期の講堂基壇は、基壇南辺の西側で造り直しの痕跡が見られる以外は創建期の基壇をそのまま踏襲して基壇としています。これは創建期基壇と同等の規模と考えられます。

伽藍城の内外を区画する回廊の痕跡は見つかっていませんが、興道寺庵寺においても中門から金堂、塔を開み、講堂へと至る回廊が廻っていたものと考えられます。



写真16 再建期塔南壇西辺・南辺



写真17 再建期中門基壇



写真18 再建期講堂基壇北辺



図5 興道寺廐寺・伽藍域平面模式図(縮尺1/500)

古代寺院では、伽藍を取り囲むように寺院地（寺域）が広がっています。この寺域には、特に伽藍の北側を中心に、僧尼が食事を取る食堂、僧尼が使用する僧坊、経典を納めて置く経蔵や鐘を打つ鐘楼、寺院を維持する人達が使用する雜舎、鍛冶などをおこなう工房などの建物群が展開していたものと考えられます。

実際、興道寺廃寺でも伽藍北方で掘立柱建物跡や柱穴列が、東方では竪穴建物跡、掘立柱建物跡が見つかっています。また、建物群に留まらず、土坑、溝、小穴など、多くの遺構が見つかっていますので、多くの人の手が寺域全体に及んでいるものと考えられます。

寺域の四至を構成する施設として、南門と寺院の内外を区画するための築地塀、溝などがあります。興道寺廃寺の発掘調査では、南門基壇と寺域北限と西限の溝跡が確認されています。

南門は、寺院地に入るための正面の門です。いわば寺院の玄関にあたります。

創建期の南門基壇は不明ですが、再建期の南門基壇の下層で創建期の寺域南限に伴う可能性がある2条の東西溝が見つかっています。

再建期の南門基壇は、広く整地を施した後に基壇を盛土で造り、外装に石積みを伴います。基壇の南北軸の方位は座標北から4度西偏し、基壇の規模は東西約7.2m、南北約5.0mに復元できます。

北側と西側で寺院地の内外を画したと考えられる溝跡は幅約1mで、特に西側の南北溝は一定の深さもあり、溝の方舟も途中で変わっているので、長期間にわたって維持された溝と考えられます。寺域の排水を兼ねた基幹水路であった可能性も想定されるところです。興道寺廃寺では築地塀の痕跡は見つかっていませんが、これらの溝が築地塀の雨落ち溝であったとすれば、寺院を取り囲む築地塀も存在したことでしょう。



写真19 伽藍北方の掘立柱建物跡群



写真20 伽藍東方の竪穴建物跡



写真21 再建期南門基壇北西隅部



写真22 寺域西限の南北溝

興道寺廃寺の出土遺物

興道寺廃寺の発掘調査によって、寺院建物の屋根を覆っていた多くの瓦、^{かづら}灯明で用いられた土器、建物部材と考えられる土壁や鉄釘、本尊仏の一部と考えられる塑像蝶巻などが出土しています。

瓦には3型式の軒瓦、丸瓦、平瓦、寝斗瓦、隅落とし瓦、鷹尾または鬼板瓦と考えられるものなどがあります。軒瓦には、①山田寺式と言われるもので、7世紀終わり頃に滋賀県の湖東地域からもたらされたと考えられる単弁八葉蓮華文軒丸瓦と三重孤文軒平瓦、②在地的な文様をもち、8世紀初め頃に作られたと考えられる素弁十葉蓮華文軒丸瓦と三重孤文軒平瓦、③大和地域に系譜をもつと考えられ、8世紀前半に作られたと考えられる素弁九葉蓮華文軒丸瓦と偏行唐草文軒平瓦があります。鷹尾（鬼板瓦）とみられるものには花弁をあしらったスタンプ文が見られます。丸瓦は無段式と有段式のものがあり、木筒に粘土板を巻き付けて作ります。平瓦は粘土板を桶に巻き付けて作ります。興道寺廃寺では成形台を用いた一枚作りの平瓦は確認されていません。瓦の凸面の叩き目（原体として、平行叩き1原体・正格子3原体・斜格子3原体・縦目2原体の計9原体がこれまでに確認されています。

再建期の金堂基壇の周辺からは多くの瓦片とともに、建築材と考えられる土壁、鉄釘が出土しました。土壁の表面には白土がみられます。鉄釘は十数点あり、10～20cmの長さがあるなど大型のもので、寺院北方の集落では鍛冶関連遺物も出土しているので、近郊で作られて寺院建設のために持ち込まれたものと考えられます。

伽藍地は宗教空間であるため、寺院内から土器の出土は多くありませんが、仏器を模倣したと考えられる土器や灯明に用いられた土器も見られます。仏器模倣の土器として鉄鉢形須恵器、水瓶と考えられる土器などが出土しています。灯明に用いられた土器として、8世紀後半から9世紀前半にかけての須恵器杯・皿と土師器碗・皿が一定程度出土しています。金堂や塔の基壇の周辺のみでなく、中門基壇の西側や塔基壇の東側など、寺域内から広く出土する傾向があります。いずれも土器の内外面や口縁部付近に煤が付着し、全体的に黒みを帯びるものも見られます。

自然遺物として寺域西限の南北溝の埋土から樹木や草木の花粉を若干採集しています。栽培植物のソバ属の花粉が産出されたことから、周辺でソバ栽培が行われていた可能性も考えられます。



写真23 興道寺遺跡出土瓦



写真24 興道寺遺跡出土
鶴尾または鬼板瓦



写真25 興道寺遺跡出土鉄釘

古代寺院では、塑像を本尊として安置する事例は多く、各地の古代寺院遺跡の発掘調査で塑像の一部や螺髪が出土することがあります。興道寺魔寺では8世紀のものと考えられる塑像螺髪11点が出土しています。再建期の金堂基壇の北側の瓦溜より周辺から砲弾形の塑像螺髪10点、再建期の塔基壇の心礎抜き取り坑と考えられる土坑から円錐形の螺髪1点が出土しました。螺髪はいずれも塑作で、螺髪の側面の片側、また両側に型の合わせ目が残るものもあります。大きさは円錐形のものが器高2.0cm、底面径1.8cm、砲弾形のものは器高が最大4.7cm、底面径は2.1～2.7cmです。1点を除いて底面に穿孔があり、底面を斜めにカットしたものや、側面に押さえナナを施したものもあるように、塑像頭部への取り付けはその部位に応じて工夫がされていたようです。砲弾形の螺髪の大きさから考えて丈六仏（一丈六尺仏、坐像で約2.4m）の塑像であったものと考えられます。

再建期の中門基壇の西側の整地層からは、奈良時代に鋳造された銅製鏡貨14点が出土しました。

鏡種は和同開珎3枚、萬年通寶4枚、神功開寶6枚、萬年通寶が神功開寶かいずれかのもの1枚で、和同開珎は完形品のもので外縁外径23.1mm、萬年通寶は完形品のもので外縁外径26.2mm、神功開寶は外縁外径25.0～26.1mmの大きさです。祭祀に伴って散錢がおこなわれたものと考えられます。

「耳」と墨書きされた須恵器蓋は再建期の塔基壇の整地層の南西隅部から出土しました。9世紀末頃から10世紀初め頃に作られた土器です。文字が大きく書かれていることが特徴で、この耳という文字が示す意味については、寺名、人名、地域名のいずれかを示すものとして注目されます。



写真26 興道寺魔寺出土塑像螺髪



図6 塑像イラスト図



写真27 興道寺魔寺出土銅製鏡貨



写真28 興道寺魔寺出土「耳」墨書き須恵器

高善庵遺跡・興道寺遺跡

高善庵遺跡は興道寺魔寺の南方の山隅に所在する遺跡です。興道寺魔寺に瓦を供給した瓦窯の所在がわからない中、高善庵遺跡の付近に瓦窯の存在が想定されています。発見の経緯は不明ですが、昭和12(1937)年に小字高善庵から出土したことを墨書きする瓦片4点が現存しています。遺跡の北西隅部には日吉神社の社へ、かつて小学校などの建物も建ち、一部で土砂掘削が行われているなど旧地形が大きく変貌しています。高善庵出土瓦は製作技法、胎土(瓦の土)が興道寺魔寺出土瓦と酷似し、また焼け歪んだ平瓦があることは興道寺魔寺に瓦を供給した瓦窯が存在する可能性を暗示しているものと考えられます。

興道寺魔寺の北方から北西側にかけて奈良時代の集落、興道寺遺跡が広がっています。この寺院北方集落では、8世紀前半を中心とする時期の竪穴建物跡、掘立柱建物跡などが見つかり、須恵器・土師器の食膳具(食器)・煮炊具・製塩土器、鉄釘、鉄製鍛錬車などの鉄器、輪羽口や鉄滓などの鉄冶関連遺物などが出土しています。

興道寺遺跡の集落では竪穴建物と掘立柱建物が組となり、建物小群を構成して分布していることが特徴で、興道寺魔寺の北方にあることから、これまで寺院付属集落としての性格が想定されてきました。しかし、近年の調査で竪穴建物や土坑などから一定量の製塩土器が出土し、海岸部から離れた内陸地にしては多くの製塩土器が出土していることもあり、製塩に関係する工房としてのあり方も想定されています。また、若狭地方でも数少ない畿内産(系)土師器の出土遺跡としても注目されるところです。



写真29 高善庵遺跡遠景



写真30 高善庵遺跡出土瓦



写真31 興道寺遺跡竪穴建物跡



写真32 興道寺遺跡出土鐵鉢形須恵器



写真33 興道寺遺跡出土鰐羽口



写真34 興道寺遺跡出土鐵滓

興道寺廃寺と耳別氏

興道寺廃寺を建立了豪族として、6世紀の耳川下流域の有力豪族（獅子塚古墳、興道寺古墳群の被葬者層）の後裔集団が想定されます。古くから耳別氏の名が寺院建立氏族として挙げられてきました。これは、耳別氏が興道寺廃寺が所在する若狭国三方郡^{彦美}（耳、美々）郷を拠点とする豪族で、また『古事記』開化天皇段にも「若狹之耳別」として記述が見えることなどを根拠としています。

日坐王の系譜上では日坐王の子にあたる室毘古王が若狹之耳別の祖であることが『古事記』に記されていますが、これ以外にも耳別氏に関する史料として、都城出土木簡に彌美郷の別氏の記銘があることや、『古事記』継体天皇段にも^{彦美}耳王という名が見えることが注目されます。耳王は継体天皇と三尾君^{加多夫}の娘（または妹の後比光）との子として系譜づけられ、耳別氏が継体の子の耳王を養育した氏族であった可能性も推測されています。

6世紀以後の耳別氏の動向として、新王統の継体天皇とつながることで勢力を保っていたものと考えられ、興道寺廃寺の建立氏族を考える場合、直接的には在地首長層にあたる獅子塚古墳や興道寺古墳群などの被葬者層の後裔集団を考えることが妥当であると思われます。この後裔集団を耳別氏に充てることは、今日の調査研究の状況から考えても大過ないものと言えます。別氏は彌美郷以外にも分布していますが、特に耳川流域において隆盛を誇った耳別氏のあり方を考えれば、興道寺廃寺の創建にあたって耳別氏が中心をなし、在地の豪族（氏族）集団による寺院建立があった状況がうかがえます。

興道寺廃寺が再建を経て維持されていった背景には、耳別氏を筆頭とする地域の豪族集団が知識（財産や労働力などを寺院に寄進すること）として寺院に関わり続けたものと考えられることと、三方郡で興道寺廃寺以外に白鳳期から奈良時代までさかのばる寺院もないで、三方郡で仏教の中心的な役割を果たし、在地豪族にとっても求心的な施設であったことが考えられます。



写真35 彌美神社



写真36 平城宮跡出土木簡
(奈良文化財研究所提供)

興道寺廃寺の価値

興道寺廃寺の発掘調査成果は、地方古代寺院の一つの事例として伽藍地や寺院地の規模や建物配置、構造、出土遺物など、寺院そのものの様相が判明したのみに留まらず、地方への古代仏教の普及と定着のあり方、あるいは寺院造営と在地豪族、地域社会が密接に結びついたあり方を端的に物語る事例として注目されます。興道寺廃寺のあり方を全国各地に数多くある古代寺院の中に位置づけることは困難ですが、寺院の平面構造、建物構造を見ても決して貧弱ではなく、また長期間に及ぶ寺院の造営、維持が図られたことは、興道寺廃寺の大きな特徴のひとつです。

興道寺廃寺の重要性は、以下の2点に集約されるでしょう。

- ① 伽藍地に関して、創建期、再建期とも言うべき大きく分けて2時期の寺院造営が存在したことが判明しました。前後の時代を含めた通史を概観すれば、6世紀から7世紀前半にかけての地域豪族層の集落形成、7世紀終わり頃から8世紀初め頃の金堂、塔、（中門）の建立からなる寺院の創建、8世紀中頃の講堂の建立や塔の建て替え、8世紀後半の南門の建立、金堂・中門の建て替え、9世紀終わり頃から10世紀初め頃の寺院廃絶といった変遷を確認できます。
- ② 古墳時代後期の地域豪族の台頭から、古代寺院の創建と再建、寺院廃絶に至る約400年間に及ぶ流域の地域豪族（在地首長）層の盛衰をうかがうことができます。

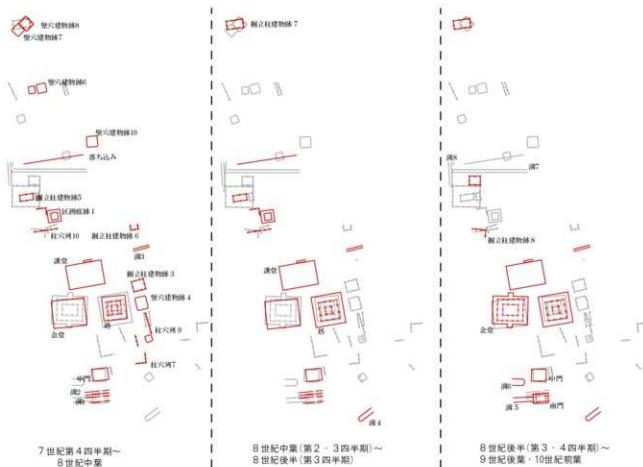


図7 興道寺廃寺遺構変遷模式図

興道寺廃寺の保存と活用

現在、美浜町教育委員会では興道寺廃寺の国史跡への指定を目指して調査研究などに取り組んでいます。興道寺廃寺の発掘調査と並行して、毎年開催されている美浜町歴史フォーラムは興道寺廃寺の価値づけを行う上で大変貴重な機会となっています。

興道寺廃寺の発掘調査にあたっては、土地所有の方々を始めとした地元の興道寺区の皆様、発掘作業や出土品整理に従事された皆様のご協力を賜りました。また、文化庁、福井県教育委員会、興道寺廃寺等調査指導委員会、関係各位にはご指導を賜りました。

今後、興道寺廃寺が末永く保存されるとともに、遺跡の重要性が正しく理解され、活用されることを願ってやみません。

本パンフレット作成にあたっては、以下の機関から写真提供、掲載許諾を受けました。

国土地理院、奈良文化財研究所、福井県教育庁埋蔵文化財調査センター、福井県立若狭歴史博物館



写真37 興道寺廃寺発掘の様子 1



写真38 興道寺廃寺発掘の様子 2



写真39 興道寺廃寺等調査指導委員会の様子



写真40 美浜町歴史フォーラムの様子



写真41 文化遺産カード「興道寺廃寺」

アクセス

- JR小浜線「美浜駅」から徒歩 約 20 分
- 舞鶴若狭自動車道「若狭美浜 IC」
または「若狭美方 IC」から車で約 10 分

興道寺廃寺

- 発行者 美浜町教育委員会
発行日 平成 29 (2017) 年 3 月 17 日
作成者 〒 919-1138
福井県三方郡美浜町原市 8-8
美浜町歴史文化館
印刷者 若越印刷株式会社美浜営業所

この電子書籍は、2017年3月17日、美浜町教育委員会が発行した『埋蔵文化財周知パンフレット 興道寺廃寺』を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、美浜町教育委員会、美浜町立図書館にあります。これ以外にも福井県立図書館、福井県教育委員会、福井県内の市町教育委員会や図書館、近隣の都道府県教育委員会や図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにも寄贈・献本しています。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

この電子書籍の底本作成時に他機関等から写真・図表等の提供を受けている場合がありますが、電子書籍を作成し『全国遺跡報告総覧』にアップロードする上で、複製権、公衆送信権にかかる許諾を受けていないものについては、該当部分を削除し、白抜きとされています。これらの写真等の閲覧は底本にて行ってください。

書名：埋蔵文化財周知パンフレット 興道寺廃寺

発行：美浜町教育委員会

〒919-1138 福井県三方郡美浜町河原市8号8番地（美浜町歴史文化館）

電話：0770-32-0027

電子書籍制作日：令和2年(2020)3月17日